

Title	<書評>櫻井義秀著『人口減少時代の宗教文化論—宗教は人を幸せにするか』
Author(s)	孫, 雪瑩
Citation	宗教と社会貢献. 2018, 8(1), p. 163-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68261
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

櫻井義秀著

『人口減少時代の宗教文化論—宗教は人を幸せにするか』

北海道大学出版会、2017年5月25日、A5判、298頁、2,600円(税別)

孫雪瑩*

1. はじめに

日本の総人口は2011年から減り続け、2060年に高齢者は人口の4割になるとされている。人口減少・超高齢という時勢の中に、宗教は世俗化の波に飲まれるとされるが、どのように生き残っていくのだろうか。

高度経済成長を経て、定常型経済から下降局面に入る日本社会は人口減少、超高齢化、格差、貧困、地域の活気の喪失など諸問題を抱えている。日本社会の仕組みが変化する中で、人々は世界観や価値観を再び見直すだろう。著者は、現代宗教と地域社会、震災復興と宗教、戦争の記憶とナショナリズム、スピリチュアリティ・ブームやカルト問題など様々な宗教活動を調査してきたが、本書では現代人の幸せと宗教の将来を展望した。

本書の副タイトルの通り、本書の特徴は現代に生きる人々にとって「宗教は何を提供できるのか」という問いをめぐって様々な領域で論じている点にある。寺院・神社などの伝統宗教から近年のスピリチュアルな文化まで、宗教的な人や組織や考え方が、諸問題を抱える社会状況の中でどのように有効に機能するのか、あるいはマイナスの方面で機能してしまうのか、冷静に問うている。宗教と社会のつながりを批判的な視線で再評価しており、専門知識がない人にも読みやすい本となっている。

2. 本書の目次と内容

本書の目次構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 人口減少時代を生きる宗教

一 人口構成の変動と寺院

* 大阪大学大学院人間科学研究科・博士前期課程・sunxueying0406@yahoo.co.jp

- 二 僧侶の肉食妻帯と世襲
- 三 臨床宗教師と傾聴
- 四 生老病死に向き合う医療と宗教

第二章 歴史認識と国家・ナショナリズム

- 一 神道と地域・国家
- 二 日韓関係と従軍慰安婦問題
- 三 戦争の記憶と原理主義の勃興
- 四 日本の安保法制と憲法
- 五 個人化する現代社会とナショナリズム——香港・ソウル・日本
- 六 自己効力感の不足とナショナリズム

第三章 世俗化社会のスピリチュアリティ

- 一 現代の聖地ツーリズム
- 二 ペット葬ブーム
- 三 占い・ヒーリング・疑似科学
- 四 就活の自己分析と自己啓発セミナー
- 五 体罰とブラック企業

第四章 日本のカルト問題

- 一 日本のカルト問題——オウム真理教①
- 二 時代の価値観とオウム信者の指向性——オウム真理教②
- 三 韓国の新宗教はなぜ日本に進出できたのか——統一教会①
- 四 地上天国を信じて韓国に渡った日本人女性たち——統一教会②
- 五 摂理ビジネスと靈感商法——統一教会③
- 六 大学に潜むカルト
- 七 「摂理」からの研究不正申し立て

第五章 日本人の幸せと宗教

- 一 高邁なる大志と逆境
- 二 原発事故被災と震災復興
- 三 被災地の復興と地域が抱える課題
- 四 東アジアの福祉レジームと宗教
- 五 宗教とウェルビーイング

おわりに

初出一覧

「第一章 人口減少時代を生きる宗教」では、日本社会の大きな転換期に宗教はどのように変わっていくのかが示されている。

明治時代には日本の人口激増により、日本の国力は上昇し続けた。現在では、少子高齢化が進み、総人口が減少しながらも、新産業の発展による労働生産性の向上、女性や高齢者の労働参加、さらに外国人の移住者や労働者の増加により、労働力不足の現状は改善している。

少子高齢化は決して日本経済の軟調を意味しているとは言えないものの、日本の伝統宗教には強く影響を及ぼしていることは事実である。まず第一に、日本の伝統宗教、つまり世襲の僧侶や神主、檀家制度や氏子制度が地方自治体の消滅によって根底から崩れていく。第二に、日本の伝統宗教は、高齢者人口が三割から四割になろうとする日本社会の要求に適應するかどうか、そして、生活満足度に関わる生老病死への対応が問われている。

そこで著者は寺院が取り組むべき課題を三つあげて、その対策として、寺院運営の新しいモデルを提案している。一つは、檀家制度を寺院維持の前提とせず、運営力をあげて、歳入をあげる。もう一つは、歳入が百万円以下の寺院では、生活をする上での困難が生じないようにするために、人材登用など新しい仕組みをあげた。さらに、高齢社会における寺院は、老親の介護や看取り、葬儀の実施という人生の発達課題に適應すること、およびサードエイジャーのたまり場、集える社会的空間となるなどの役割を期待されている。

現代医療と死生観の変化について言及する際、臨床宗教師の存在を無視できない。日本では死期まで医療行為を中断なく受け続けられる。ところが、現在は QOL（クオリティ・オブ・ライフ）が重視され、緩和ケアを求める人が増えている。現代社会に生きる人びとは、医療技術が生老病死を統制できるのだというような錯覚をしている。難治性の病におかされた場合に、自身は穏やかな死を望んでいるにも関わらず、延命治療がなされる患者は少なくない。さらに、死にゆくかどうかを考え悩む人に対し、著者は死後だけお付き合いをする「葬式仏教」では宗教として役不足と述べている。

「第二章 歴史認識と国家・ナショナリズム」では、日本人の集団的記憶に関して改善すべき点と、「個人化」を進み続ける日本人の未来へ向けて宗

教が何を提供できるかが提示されている。

まず、国際政治的な視点から、著者は日本国憲法の9条に象徴される「平和主義」国家のイメージと韓国、中国への植民地支配や戦時の加害行為への謝罪の欠如という実態との矛盾を示している。靖国神社を参拝することが引き起こす一連の論争について、著者は神道が「伊勢神宮-天皇家」と「靖国神社・護国神社」だけではないこと、古くからの伝統、日本の精神文化である神社神道を政治的に利用しないことに注意を向けなければならないと指摘する。神社神道は過去の経緯から国家との関わりが深い、参拝するとき、公用車に乗り、軍服を着、示威的な姿を見せるより、崇敬の念を持ちつつ地域の人々が守り続けてきた自然の知恵を神社信仰として伝える方が大事ではないだろうかと著者は述べている。その上で、著者は日本人が自己理解と歴史認識を深めると同時に、日本人としての自己理解と日本の歴史や文化、社会を対外説明することを重要視すべきだと述べる。一方、客観的に戦時の歴史を認識すれば、加害行為の被害者は中韓だけではなく沖縄戦を代表する日本の国内にも存在する。さらに、今後もイスラム国などの悲劇をもたらす崇高かつ空虚な理念に基づく暴力には警戒しなければならない。一方、日本社会の実情を多様な側面から正確に他国に伝え、特定的かつ一面的な見方を拡散しないようにとの危機感も著者は示している。

また、現代社会学における代表的な研究者の一人であるドイツのウルリッヒ・ベックは、「個人化」という概念を提示した。つまり、個人が生き方を選択する際に、次第に社会的制度・規範の束縛を脱し、多元化に向かう過程である。しかしながら、経済成長の鈍化と少子高齢化社会における社会保障負担の限界から、社会はリスク対応を個人に求めるようになる。その結果、不安とストレスによるナショナリズムの誘発、強権政治を支持することなどにつながる。そこで、こうした状況への対応として、宗教文化における「普遍主義」において、個別の民族や歴史的状況を乗り越え、結節点となり、人間の尊厳や誰でも幸せに生きたいという価値観を構築する役割が期待されている。

世界第三位のGDPを維持している日本。さりながら、自己効力感や中国・韓国・アメリカより有意に低いのである。その改善策として、著者は大阪大学の稲場圭信の宗教的利他主義の研究に言及し、「無自覚の宗教性」と名付けられた、ボランティアで活躍する人々が口にする「おたがいさま」という

理念こそ、宗教が次世代へ伝えていくべきことではないだろうかと指摘した。

「第三章 世俗化社会のスピリチュアリティ」では、世俗化が進むのと同時に、世俗的なものに宗教性を再び求めようという志向性が指摘され、現代日本社会におけるスピリチュアリティが考察されている。

著者は、現在のスピリチュアリティを、集団の聖性ではなく個人の嗜好性や感情、自己の能力に関わる聖性を帯びた感覚であると定義した。ルターが抗議した贖宥状にせよ、親鸞が反対した護符の御利益信仰にせよ、裏に隠されているのは、庶民の素朴な極楽往生の願いである。同様に、聖地を拝謁する旅行者の大半はかならずしも宗教の信仰と聖人を崇拝するというわけではないのではないかと著者は述べている。現代的な聖地観光では、自己充足・自己承認や、聖地本来の宗教的脈絡を離れた物語性が重視されていると著者は指摘する。

また、日本のペット葬、供養ブームについては、それらを通じる精神的癒しの機能が注目されている。高額な費用、仏教教学上の「ペットの魂はどこへいくのか」という問題、葬儀の商業化といった諸要素にも関わらず、葬儀を執行し、ペットの来世について解説されることで、ペットを喪失した人は安心できる。経済的余裕があれば、納骨堂を建立し、参拝するのもいい。そうでなければ、簡素に処理するのもいい。ペット葬に自由な選び方があるのは人間の葬礼でも同様であるが、現代人の葬礼の私事化と感情化が見られる。

自由な選択と言えば、占い・ヒーリング・疑似科学などが大量に存在し、悪徳業者が氾濫する業界に対し、どうすればよいのだろうか。著者は、先が見通せない状況や不安定さに耐える「強い心」を持つことを、現代人に必要なものとしてあげている。つまり、科学や技術の盲目的崇拝を否定し、リスクがあることが問題なのではなく、リスクを知り、リスクにどう対応するかを話し合うべきであり、対応できないものは対応自体をやめるべきであると著者は指摘している。

「第四章 日本のカルト問題」では、20年近くカルト問題の研究をする著者は、オウム真理教や統一教会、摂理というカルトの事例分析を行い、さらには、大学でのカルト対策を含めた安全な教育環境の整備を呼びかけている。

カルトの潜在信者として、著者は大学生や二十代の社会人を危惧していると強調する。激変し続ける現代においては、精神的充足と人間関係の充足が重視されている一方で、社会奉仕や教養的なことは軽視されている傾向がある。そして、スピリチュアリティ（精神的な充足性）の出現には次のような背景がある。すなわち、自己の感覚や具体的な人間関係を求めることで社会経済的水準や知的水準が上がるが、それは民主的制度が成熟した社会では普遍的に見られる現象であると著者は指摘する。カルトは、現代人の社会意識と重なる指向性を持ち、新しい信徒を吸収する。例えば、1990年の好景気当時、お金や遊びに飽きた人々はオウム真理教に「社会の虚しさ」の感覚を逆手に取られ、利用されたわけである。

SNSなどの情報技術が発展しながら、常に他者からの視線に身を置き、他人と比較するという時代に我々は生きている。すると、この仮想社会で、匿名の他者から承認を期待するようになる。一方で、承認においては、他者からの承認に限らず、自分で自分の価値を認め、自分から与える自己承認も重要であるのだ。

「第五章 日本人の幸せと宗教」では、日本人の逆境と言われる問題をまとめ、日本人の幸福感と宗教の関わりを捉えた。

一体、日本人の逆境とはなんなのか。第一に、グローバルな人材養成の過程の中で、労働者間競争が厳しくなり、経済や社会はこの時代に対応できるあり方の変化に直面している。第二に、東日本大震災における福島第1原子力発電所の事故により、日本の原子力発電所は負の資産に変わった。脱原発の費用は最低でも約40兆円に及び、また、原発に変わるエネルギー資源は簡単に手に入るものではない。第三に、福祉制度の維持と改善のため、現行の年金制度は困難に突き当たる。それだけに限らず、高齢社会での高額医療負担、原発の後処理と東日本大震災後の被災地の復興などの課題もあり、国債は雪だるま式に増えていく。

さて、宗教には何ができるのか。まず、復興支援における活動で、稲場は日本人の無自覚の宗教性を指摘し、寺院仏教の役割が再認識された。宗教団体による心のケアには、宣教の嫌疑がかかるのに対し、著者は、宗教的な意味づけにしる、天罰と語った石原慎太郎のような政治利益での目的にしる、震災を利用する行為は死者への冒瀆と同じであると述べる。稲場の「おたがいさま」のような世俗的な宗教性が注目されるように、結果から言えば、共

にいる存在として、宗教は心の専門家以上に被災者に届いているようである。

また、日本における宗教は社会福祉制度の中においてどのような役割を果たしているだろうか。市場・国家・家族によって構成される西欧型福祉レジームに対し、アジア型福祉レジームは宗教・国家・家族によって構成されている。宗教がこれらの国で重要な役割を演じる原因は、日本と中国を除けば、政府による社会保障が十分ではないこと、人々の宗教に対する信頼が高いことが挙げられる。ところが、日本で近年宗教団体が新しい福祉の担い手として活動可能な領域を生み出し、「宗教の社会貢献」に注目が集まるようになった。

最後に、著者は、現代人の幸せとどこかで関係を取り結ぼうとする宗教の将来を展望した。著者は宗教心理学のマイケル・ローマーの調査に言及した。彼はその調査でストレスと宗教的な信念や実践との対応関係を考察した。その結論として、信仰や宗教実践で幸せになるのは当たり前であるという考え方に反し、宗教意識の高さとストレスの高さの相関が指摘された。一方で、成長主義と効率主義が推奨される社会の仕組みや価値観の中、宗教と社会的孤立の予防、生きる意味との関連について十分に重視されていないことが示されている。

3. 本書に対するコメント

本書は著者も述べる通り「宗教三割、社会七割」という内容である。著者は「宗教という花を描くための地である社会を描くことの方に関心が向いている」と述べた。その理由は、宗教制度や信仰継承を成立させる社会変動の土台を無視し、宗教施設や宗教者だけを叙述しても宗教全体を説明したことにはならないこと、もう一つは、日本においては初詣、墓参りなどをしてはいても無宗教を自認する人々が多数派であり、復興支援におたがいさまといった無自覚の宗教性を発揮する風土があることである。

「宗教」を議論する際に、著者は批判的な視線、平易な言葉で宗教と社会のつながりや宗教文化のあり方を理解してもらえるような宗教文化論を提案している。また、本書で扱われたトピックは、現代人であるなら、誰にとっても深く関係があり示唆に富んでいる。

例えば、「第四章 日本のカルト問題」でオウム真理教などを事例に、どのような経緯でカルトに巻き込まれたのかを説明する際、社会意識のレベルで、カルトの指向性は現代人の社会意識と重なっていると指摘した。評者はここで蒲松齡の『聊齋志異』の中にある貧乏書生のお話を思い出した。その書生は国家試験である科挙に何年間にもわたり挑戦しながら登科されず、村民たちに嘲笑われていた。

俸しい失意の中、ある日、白い服の妙齡の婦人に出会った。婦人はお金も功名もない書生に宝を与え身を任せた。貧乏書生はいよいよ人生の希望が見え、のんびりと暮らし始めた。そして、以前書生を笑ったり、いじめたりした村民は書生にあの女は妖怪だと教えた。書生は身体に弱さを覚えていたところであったが、簡単にこれらの村民を信じ貧乏かつ寂しい生活に戻るわけにはいかない。

需要があれば供給があるかどうかははっきりと言えないが、カルト問題を見ると、問題はカルト団体側にだけあるのではない。カルトに巻き込まれる人々が何を求めているのか、そして、カルト以外の安全な代替物が存在するのかということについても考えるべきである。

そして、「第五章 日本人の幸せと宗教」で議論された通り、人を幸せにする要素は、健康と安心できる生活が必要条件であるが、それだけでは生活満足度は上がらない。「つながり」と「居場所」を求める思い、尊厳ある死を迎えたいという要望といった老後の課題は誰でも直面する問題である。このように、本書が扱っているトピックは、普遍的であり無視できない問題である。

また、本書は啓発的であり、社会現象について様々な新しい視点を提供してくれる。「第一章 人口減少時代を生きる宗教」では、著者は人口減少の背景における過疎地域や檀家が数十軒に満たない寺院を維持する一つの方法として、住職の兼職をあげ、さらに、寺院の血脈相承の意義を論じた。今年の就職活動も始まってきているが、「第三章 世俗化社会のスピリチュアリティ」で著者は、就活における適性試験などの就活活動に対し、与えられた機会をいかせるのも能力とやる気のなせる技であって、適性の問題ではないと論ずる。日々の積み重ねで得られる知識や社会経験での成長をなおざりにして、自己分析と適性を開花させるコーチングに過大な期待を抱かせる就活塾は警戒すべきだと指摘する。

変化が目まぐるしい社会は、活力が溢れる社会でもある。宗教も、変化が激しい社会の中において、挑戦を迫られている。日本の宗教文化に興味がある読者、また、宗教を含めた文化の力が人間や社会を豊かにすると信じる読者にとっても示唆に富む貴重な一冊である。